

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2490400062		
法人名	株式会社シルバーアシストのぼの		
事業所名	グループホーム白鳥		
所在地	三重県亀山市能褒野町82-1		
自己評価作成日	平成 27 年 10 月 12 日	評価結果市町提出日	平成28年1月5日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/24/index.php?action_kouhvu_detail_2015_022_kihon=true&JigyosyoCd=2490400062-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 27 年 11 月 20 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

温かい笑顔、優しい気持ち、わかりやすい言葉をモットーに接することを心掛けている。
利用者の方がいつも笑顔でいられるように、利用者と職員の声がかつても聞こえるホームにしている。
利用者ひとりひとりの状態を把握して、穏やかに過ごしていけるよう、ターミナルケアまでの支援手伝いを心掛けている。
利用者は日中のほとんどの時間を自室ではなくリビングで過ごし、皆で会話や、趣味、テレビなど楽しめるようにしている。
職員はヒヤリハットを積極的に報告するなど、情報共有して介護の改善に努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

代表者家族が地元で開所した事業所であるため、地域に溶け込み、高齢者から子供たちまで交流し、デイサービス、子供SOSの家、講演会依頼、災害時の炊き出し用ガスボンベ設置と避難場所としての利用等がされ、地域住民から頼りにされる存在となっている。職員は利用者・家族とのつながりを大切にしており、細かく連絡を取り合い、面会や運営推進会議、家族交流会に参加して頂けるよう努力している。職員全員で考え、取り組んでいく体制作りと、業務の役割分担がされ、自己評価も全職員が行っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者が自立した日常生活を営むことができるよう家庭的な環境を整え、介護支援を行うなど、職員全員が理念を共有。「温かい笑顔」「優しい気持ち」「わかりやすい言葉」を私たちのモットーとして、利用者の立場に立ったサービスを心掛け、実践している。	職員会議時には理念について話し合い、笑顔と家庭的な雰囲気を大切にし、おだやかに安心して過ごせるよう実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	管理者(事業者)が地元なので元々地域とのつながりは深い。地域ボランティアの方のショーなどでは近隣のお年寄りにも声掛けをし楽しんでもらっている。また、下校途中の小学生がトイレに立ち寄ったり、近隣農家からの野菜差し入れなどもいただいている。	育成会からの依頼で子供SOSの家の登録、民生委員からの相談、地元での講演会で地域貢献し、散歩中に庭の果物を取らせて頂いたり、事業所のお祭りに地域住民を招いたりして交流できている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治会長、市議、老人会長、民生委員など地元の方に運営推進会議のメンバーになってもらっており、地域へ認知症への理解を深めるよう発信している。今後も実践を通じて積み上げる理解と支援の方法を、地域の人々に向けて生かしていきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営会議は2ヶ月に1回計画的に開催。ホームでのありのままの生活・活動を報告し、地域や行政の方からは助言協力をいただき、サービス向上に生かしている。入所者家族は毎回交代で参加、入所者は会議に同席していただいている。	毎回利用者と家族の参加があり、前市議会議員や老人会長、時には銀行の支店長や駐在所の警官、社協職員も参加し、新しい情報や意見・提案を頂きサービス向上に活かしている。また会議での職員の研修発表や簡単な手遊びも取り入れ充実させている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	亀山市高齢障がい支援室、鈴鹿亀山地区広域連合介護保険課の担当者とは日頃より連絡を密にし、運営の実情を伝え、助言指導をいただくなど、協力関係を築いている。	必要に応じて相談しており、市からは中学生福祉体験や障害者団体の外出時のトイレ利用の依頼があり、協力関係は築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員は介護保険指定基準で禁止対象となっている身体的拘束や利用者の行動を制限する行為を理解し、拘束しないケアに取り組んでいる。身体拘束委員会を組織し、年4回会議を開催している。	事業所と同会社内デイサービスと合同の拘束委員会があり、会議時に全職員へ報告を行っている。利用者を良く見て・良く聞くことで、拘束なしの対応をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者の尊厳の保持と自立支援という介護の基本理念を踏まえ、接するよう心掛けている。特に心理的虐待にならないよう職員相互で注意・話し合い、防止に努めている。虐待はあってはならない事であり、全職員が理解し実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者とその家族にはまだ支援の必要性がないが、職員会議で勉強する機会を持ち、法律・制度を理解し活用できるよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結、解約、介護報酬改定の際はよくわかるよう十分説明し、理解納得を得ている。また、入居後でもわからないところは、いつでも質問してもらい答えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者とは毎日の会話から気持ちを汲み取り、家族は面会時や電話で意見や要望をいただいている。日頃より良い関係を築き、話し合って介護に反映している。また玄關ホールに意見箱を設置している。ただし、遠慮もあると思うので、外部評価アンケートの結果も参考に反映したい。	重度化のため、利用者から具体的に聞き出す事は難しいので、家族と密に連絡を取り合い、面会や電話時、家族交流会や運営推進会議時に意見を頂き、反映させるよう努力している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回職員会議を開催して、意見や提案を出し合い業務改善に努めている。また代表者(管理者)を含めて従業員同士が家族的でいつでも何でも言える雰囲気でのコミュニケーションをよくとっている。	職員同士が仲良く感謝あって支援に取り組めるよう、雰囲気作りや懇親会を行っている。日常業務の中や会議時に意見を出し合い、反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者(管理者)も職員と共に実務を行っており、勤務状況を良く理解している。勤務形態に無理が無く、やりがいが持てる明るい職場環境を保つよう、整備に努めている。定年は70歳		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は他の職員とともに現場に入り常に接している。また、職員を官民含めた外部研修に積極的に参加させ、スキルアップを図り、実践に生かしてもらおう機会をつくっている。カンファレンスや運営推進会議で報告発表している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者の開催する講習会へ参加するなど交流を図っている。また今年度は地域密着型サービス事業所連絡会の研修に参加し、より広く交流する機会を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人・家族と面談を行い、望んでいる内容を把握している。ケアマネジャーからも本人の情報を聞き取り把握し、特に入居初期には不安を与えないよう、本人の話によく耳を傾け、関係づくりに努めている。実際、本人から問題点を聞き出すのは難しいことだが、気長に取り組んでいく。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との信頼関係は大切にしている。入居者を受け入れたことを、家族も受け入れたとの思いで接し、不安や要望を受け止め、家族しかできない事と職員がやらなければいけない事を理解し合い、良好な信頼関係を継続するよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約(入居)前に家族との面会はもちろんのこと、必ず本人とも会話話を聞き、本人のために最もふさわしいサービスを考える。本人のために良ければ家族とも話し合い、他サービス利用も含めた対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者を目上の人として敬う気持ちを忘れず、人生の先輩の体験談に耳を傾け、グループホームのお互いが家族と思い、一日中家庭的で落ち着いた雰囲気の中で、それぞれに応じた暮らしができるよう心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時には、入所者とできるだけゆっくりと会話のできる場をつくっている。こちらからは本人のここ最近の状況、些細なことでも家族に伝えている。また急を要する場合は電話等、離れていても、共に支えあう関係を大切にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所したことでなじみの人の足が遠のいているので、本人の楽しかったこと、思い出話などに耳を傾け、心の中での関係が途切れないよう支援に努めている。昔話には表情も生き生きと話をされる。	地域交流や家族との関係を大切にすることで利用者也関係が途切れないよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中を皆がリビングで過ごすようにして、利用者同士が並んで一緒にテレビを観たり、洗濯物をたたんだり、家事の分担などお互い仲良く支え合えるようにしている。お互い思いやりが持てるよう、必要な時は職員が口・耳・目となり、間に入って働きかけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	在宅へ戻った方へは適宜訪問したり、他サービスへ移行した方については、本人のケアマネジャーと連絡を取るなどしてフォローする。医療機関へ移った方とは家族とも連絡を取り支援に努めるなどしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望を聞いて、また本人から聞けない場合は家族から聞いて、希望に沿って楽しく暮らせるよう努めている。	本人からの意見を聞き取ることは難しいが、日常の様子や入居前のサービス担当者、家族からの聞き取りとセンター方式の利用により把握している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から、これまでの暮らしの様子や、好み、仕事、性格など生活歴を聞き取り把握し大切に、本人との会話や介護に反映、可能な限り生活スタイル維持に取り組んでいる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の過ごし方はそれぞれの意思を尊重しつつ、見守り、声掛けなどで現状の把握は日々注意深く行い、カルテに記録・申送りで引き継ぎ伝達し、状態の変化に速やかな対処ができるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族等との聞き取り、話し合い、また毎月のカンファレンスや、必要に応じサービス担当者会議を行い、介護計画を作成している。	本人や家族の意向を伺った上で、毎月の会議時に全利用者について検討し、介護計画を作成している。モニタリングは毎日行い、チェックしている。	重度の利用者が多く、意向や目標を見つけ出すことは難しいが、介護計画書が画一的な内容にならず、家族や職員の支援の共通の道筋となるようアイデアを出し合い、活用していけるよう、一度再検討してみる事を期待する。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子をカルテに記入し、気づきや特記事項など、カルテの情報を共有し介護計画に活かしている。またカンファレンスで介護の問題点を取り上げ、意見を出し合い改善している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームとして本人、家族を支えるサービスの提供に努めている。希望の場所への外出、外食や、デイサービスとの合同レクリエーションなどの企画も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営会議での地域の代表の方との交流を通して、できるかぎり地域の行事等に参加の機会をつくり、協働し安全で豊かな暮らしを楽しめるように努めている。ホームの運動会に地域の方に参加していただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診はかかりつけ医で適切に受けられるように家族の協力を得て支援している。また本人の状態の適切な情報提供等を行っている。現在は家族の希望もあり、9名中8名のかかりつけ医は協定医(町内)でもある。	協力医には24時間体制で相談でき、対応してもらえる。受診は必要に応じて、家族と職員が協力して行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	代表者(管理者)が看護職の職歴が長く医療知識がある。職員は日々の気づきを共有し、管理者との連携で早く適切な受診が受けられるよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	救急搬送、入院時には病院まで同行し、病院、家族との情報交換、相談に努めるなど、退院後の看護に反映させている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期のあり方については、入所時に説明と家族の意向確認を行っている。家族との話し合いを密にし、終末期には再度意向を尊重し、ターミナルケアに取り組んでいる。今年度は2名の方を看取り(家族も立ち会い)。	事業所としては、希望があれば看取りまで支援する体制であり、ベテラン准看護師の管理者を中心に、医師・職員・家族が協力して重度化や終末期への支援を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの取り扱い訓練など、すべての職員が応急手当や初期対応ができるレベルとなるよう努めている。実践力を身に付けるため、定期的に訓練の機会を設けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の訓練(市の消防参加と自主)を計画的に職員入所者全員参加で実施している。指定避難場所である小学校までのルート安全確認訓練も実施。また、当施設での受入れも想定し、駐車場に炊き出し施設(ガス)も設置。(台所はIH、風呂はガス)	火災と地震の避難訓練を全利用者と職員で行っている。反省会を行い、次回に向けての改善点を見つけてよう取り組んでいる。ヘルメットと災害時用ガスボンベ、食料の備蓄は充分にあり、近隣住民の避難先としても対応できる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室・トイレ入室時のノック、声掛けの励行や、日常より心理的外傷を与えることが無いよう、一人ひとりにあった話しかけを心掛け、コミュニケーションを大切にしている。トイレ誘導はプライバシーを損なわないよう丁寧な言葉で配慮ある声掛けをしている。	入浴や排泄時には恥ずかしい思いをしないよう特に気を配り、対応や声かけをしている。プライベートな話題や情報管理にも配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望にかなうよう協力している。日頃から何でも話せる雰囲気づくりを心掛け、日常の会話を通して希望や思いをくみ取り、言葉でできない方は表情で汲み取り、できる限り自己の意思での決定・行動ができるよう取り組んでいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	リビングではそれぞれのペースに合わせた暮らしをしてもらい、できる限り無理やり押し付けることの無いよう心掛けている。ただし、朝の家事作業などでは職員より働きかける時もある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝夕着替えや、入浴後の化粧水など、清潔な身なりを心掛けている。それぞれの自身の好みのオシャレを楽しめるよう支援している。また希望者には2ヶ月に1回出張理容(美容師)で整髪してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の材料を用い、献立がマンネリにならない配慮や細かくきざんだり、柔らかくしたりなど、個々の状態に合わせた調理の工夫をして食事をたのしんでもらっている。また、もやしの芽取りや野菜のカット、後片づけ盆拭きなどを手伝っていただいている。	介護食コーディネーターを中心に、最期まで食べる事のできるよう、献立や形状に工夫を凝らしている。畑の野菜を使ったり、年1回の外食や、買って来た料理での楽しみの機会もある。なるべく自分で食べるできるようゆっくりと見守っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は一人ひとりに合わせた量と内容を工夫してバランスをとっている。また水分補給はたえず行っている。介助が必要な方には時間をかけて食事を摂ってもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎日朝と就寝前に 自分でできる方は自身で、できない方には介助をして、必ず歯磨き、うがいを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェックシートで本人の排泄リズム、パターンを把握、早めの声かけによりできるだけトイレでの排泄、自立支援をしている。ただし本人の身体の状態でもムツ使用がやむを得ない場合がある。	トイレ利用者は声掛け誘導により支援している。重度で尿意便意のない利用者が多いので、利用者のタイミングを把握してオムツ交換をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事と水分摂取、軽い運動、入浴時の腹部のマッサージ、おやつにヨーグルトなどで予防に取り組んでいる。またチェックシートで状況把握、必要に応じ内服薬で対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	体調を見ながら希望に合わせた入浴回数を実施。程度差はあるも全員が介助での入浴。入浴に際しては、ゆっくりとくつろぎ楽しい入浴タイムになるよう声掛けしながら入浴してもらっている。	体調や気分に合わせて一人ずつゆっくりと、話したり歌ったりしながら入浴している。脱衣場には着替え用の寝台があり、浴槽は3方向から入れる形になっており、車イス利用者は職員2～3人で抱えて入浴している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	枕、布団などは好みの品を持ち込み、昼間をできるだけ体を動かし楽しく過ごしてもらい、夜は安眠できるよう支援している。また昼食後は本人の希望に添って休んでもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師との連絡を密にし、服用する薬の変更があった場合の本人への影響、変化など、理解に努めている。また服薬ミスを起こさないよう処方箋をカルテに添付、前日夜勤が容器に準備、当日リーダーがチェックのダブルチェックを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	皆が生活歴を生かした役割をとはいかないが、簡単な家事の分担、コーヒーや、酒が飲める方はビールを飲んだり、また、テレビ・歌・散歩など、ささやかながら気分転換を図れるようしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自然豊かな場所であり、陽気の良い日は周囲の散歩や畑の作物の鑑賞、収穫、花見など行っている。家族の協力を得て外出に出かけることもある。また、家族と毎日散歩を楽しまれている方もいる。	事業所周囲には花木が多く、車イスで周囲を散歩したり、近くのデイサービスまで行くことが日常的な外出の機会である。歩ける利用者には声掛けして、職員の買い物に同行する時もある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金は個人で所持してもらっていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族とは面会をしてもらっている。 電話は職員が家族にかけ本人と代わったり、手紙は本人に書いてもらい面会時に渡したりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	自然豊かな場所に立地し、共用空間は余裕ある広さでゆったり快適に過ごせる。台所はオープンでお互いの顔が見える。フロアは自然光、風が入り四季を感じる。利用者には、トイレの場所がわかるよう目印(花)をつけたり、日めくりで月日曜日がわかるようサインで工夫している。	利用者が集うフロアは広々としており、窓も大きく明るい。温度や空調に気を使い、エアコンで体が冷えないようにシーリングファンを設置した。清潔で、絵画が多く飾っており、落ち着いた雰囲気である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	3人掛けソファなどで、それぞれがお気に入りの好きな場所で日向ぼっこをしたりして過ごせるよう工夫している。独りになりたいときは居室に戻るようになるが、昼間は大半をリビングでゆったり過ごしてもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	布団、枕、茶碗、箸、その他日用品、時計、家族写真など、使い慣れたものを持参して自宅感覚が持てるようにしている。また、クローゼットがあり部屋を広くすっきりして使っていただいている。	電動ベッドとクローゼット内のタンスは据え置きであるが、家具や小物の持ち込みは少なく、車イス利用者が動きやすいよう片付いた居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒時に備えた柔らかい床材や手摺など施設の安全面の配慮はとっている。入居者には 這ってでも動くなど、できることは自分ですよう働きかけ見守っている。		